

(研究ノート)

## 持続可能な地域と大学の連携

— 兵庫県丹波市との連携事例 —

Sustainability of area community-university collaboration:  
Example of Kansai University of International Studies and the  
cooperation with Tamba city, Hyogo

上 村 和 美\*  
Kazumi UEMURA

### Abstract

Kansai University of International Studies performs the activity that cooperated with Tamba-city, Hyogo to date from 2014. I divide a cooperation activity with conventional Tamba-city into three stages and look back. In the first stage, in 2015 through 2018, the second stage, 2019, the third stage is after 2020. In this report, the activity contents of the first stage and the second stage explain it in detail. Result and the future problem that I analyzed last.

キーワード：地域マネジメント, 地域連携, 地域創生

### I はじめに

関西国際大学（以下、本学）と丹波市との連携の始まりは、2014年8月の丹波市豪雨災害<sup>注1</sup>であった。復興ボランティアに本学学生・教職員が参加したことをきっかけに、2015年には丹波市と人間科学部との間で連携協定が制定された。復興段階における現地活動は、災害ボランティアにとどまらず、アジサイ栽培による農地再生プロジェクト、森林整備活動、全国高校女子野球選手権大会の運営サポート、高齢者福祉施設における音楽コンサートの企画・運営など多岐の内容におよんだ。

そして、2020年3月24日には大学全体と丹波市との協定を結ぶこととなった。これは、より幅広い分野で結び付きを強め、活力ある地域づくりや大学の教育研究機能の向上につなげるための、人材育成、健康・福祉の増進、産業振興など8項目に関する協定であった。本学は2020年4月に旧神戸山手大学との統合により、三木、尼崎、山手の3キャンパス体制となった。旧人間科学部は三木キャンパスに所在していたが、全学との協定になったことで、3キャンパス6学部の連携協定へと拡大発展したことになったのである。

本稿では、これまでの活動をあらためて整理するとともに、特に筆者が活動に関わり始めた2017

---

\* 関西国際大学 経営学部

年以降の活動についてふりかえりながら、その活動の意義を考えたい。

## II “地域” とは何か

“地域”を考察するにあたり、“地方”等の類義語が用いられることも多いことから、まず、『広辞苑』(第7版)<sup>注2</sup>での「地域」の定義から確認してみたい。

- ①区切られた土地。土地の区域。
- ②住民が共同して生活を送る地理的範囲。
- ③数カ国以上から成る区域。各国は地理的に接近し、政治・経済・文化などの面で共通性と相互関係を持つ。
- ④国際社会で、独立国ではないが、それに準ずる地位を広く認められている領域。

③は「東南アジア」が例示されており、④は国際社会での定義であることから、日本国内での活動を考えるならば、①と②の定義が当てはまることになる。さらに、“地域”で始まる熟語は「地域医療」から始まり「地域冷暖房」まで、20語が紹介・解説されている。

同様に“地方”については、以下のように定義されている。

- ①国内の一部分の土地
- ②首府以外の土地。
- ③旧軍隊用語で、軍以外の一般社会。

現在、③の意味で用いられることは少なく、①②の意味で用いられることがほとんどであろう。また、“地方”で始まる熟語は、「地方運輸局」から始まり「地方民会」まで、59語が紹介・解説されている。実に“地域”で始まる語の約3倍であり、“地方”のほうが“地域”よりも造語力が強いと考えられる。

ここで“地域”と“地方”の意味を整理すると、以下のようになるだろう。

- 地域：区画された土地の区域や一定の範囲の土地。  
地方：ある国の中のある地域。大都市に対するそれ以外の土地。

“地方”は“地域”を含意するが、都市部に対する“田舎”を想起させるものでもある。また、「地域創生」「地方創生」「地方活性化」は、ほぼ同義に用いられることが多いが、用語が使われ始めた時期が異なる。

「地域創生」は、人口減少や少子高齢化等により衰退しつつある地域を活性化することである。「地方創生」とは、東京の一極集中型社会を解消し、人口減や雇用の減少に苦しむ地方自治体の活性化を旨とする政策であり、第二次安倍晋三政権の目玉政策のひとつでもあった。

「地方活性化」とは、いわゆる「地域おこし」であり、1960年代以降の大都市圏・地方都市圏への人口移動と地方過疎化の対策として行われてきたものである。「地域再生」や「地方振興」と

いう用語が用いられる場合もある。本稿では、上記の意味を踏まえた上で、“地域”という用語を用いる。

### Ⅲ 段階別に見た丹波市との連携協定

#### 1. 協定に向けた準備段階

2014年度は、協定に向けた準備段階と位置付けられる。活動内容を時系列にしたがって整理したものが次の表1である<sup>注3</sup>。

表1 本学人間科学部と丹波市との協定に向けた活動

年月日	活動内容
2014年9月29日	丹波市からのボランティアの要請を受け、現地視察
2014年10月18日	学生へボランティアの公募。市島町の災害ボランティア活動に参加。 (学生25名, 教職員2名)
2014年10月26日	あじあん祭(学園祭)にて学生達による募金活動を実施。
2014年12月14日	学生へボランティアの公募。市島町の災害ボランティア活動に参加。 (学生13名, 教職員3名)
2015年1月20日	協定に向けて正式協議
2015年2月24日	学生へボランティアの公募。市島町にて傾聴ボランティアの活動を実施。 (学生11名, 教職員1名)
2015年3月20日	関西国際大学人間科学部と丹波市との連携協力に関する協定書 調印

現地での3回のボランティア活動を積み重ね、年度末には人間科学部と丹波市との連携協力に関する協定が結ばれた。いわば、“連携元年”とも呼べる1年であった。

#### 2. 第1ステージ(2015～2018)における連携

##### 2.1 人間科学部・体験型授業との連携

この時期は、丹波市においては初期の復興段階であったと言えよう。この期間の活動内容を時系列にしたがって整理したものが次の表2である。

調印後の2015～2018年には、当時の人間科学部(人間心理学科・経営学科)での授業(サービスマーケティング・インターンシップ等)の現地活動を精力的に行っていた。

経営学科では2年生開講の「インターンシップ」<sup>注4</sup>が必修科目であったため、そのフィールドとして特に活発な交流が行われていた。プログラム数は、2015年に1本、2016～2018年は各2本であった。経営学科では、本学強化クラブ(硬式野球部・サッカー部・硬式テニス部)所属の学生が多数在籍していることから、「全国高等学校女子硬式野球選手権大会」の運営スタッフなど、本学学生の強みを生かした特徴的プログラムでの地域貢献活動が実現されていた。この時期の活動は、新聞など数多くのメディアにも多く取り上げられている。図1に掲載例を示す。

また、人間心理学科でも、2015年に「サービスマーケティングB」、2018年に「サービスマーケティングA」の現地活動を行っている。「サービスマーケティングB」は、豪災害被害のあった前山地区において、地域の高齢者にインタビューし、こころのケアと地域づくりについて提案するというもので

表2 2015～2018年度における活動

年度	月日	項目	内容	実績
2015	2015/6/28	インターンシップ	経営学科インターンシップ(事前学修)	2016年度インターンシップ事前学修・現地視察を行う。 ■参加者:経営学科学生 6名、教職員1名
2015	2015/8/15	地域連携事業	尼崎市100周年事業 潮江サマーフェスティバル	丹波市よりふるさと農園による丹波の野菜、果物物販、等の 出店と丹波市マスコット「ちーたん」参加
2015	2015/8/3～8/7 8/26～30	インターンシップ	経営学科インターンシップ	地域資源を活用したふるさと農園の事業スタッフなどの体験 活動を通して、丹波市市島町の災害復興と地域の活性化の 支援を行う。 豪雨災害から1年に向けての復興イベント「心つなぐ2DAYs 和—船」に参加。 ■参加者:経営学科6名、教職員1名
2015	2015/9/2～9/6	サービスラーニング	人間心理学科 サービスラーニングB	豪災害被害のあった前山地区において、地域の高齢者にイン タビューし、こころのケアと地域づくりについて提案した。 ■参加者:人間心理学科13名、教職員2名
2016	2016/4/16	インターンシップ	経営学科インターンシップ (事前学修)	2016年度インターンシップ事前学修・現地視察を行う。 ■参加者:経営学科学生 2年 34名、教職員4名
2016	2016/7/28～7/31 2016/8/1～8/10	インターンシップ	経営学科インターンシップ	丹波市の地域活性化に資する全国高等学校女子硬式野球 選手権大会の運営スタッフと、地域資源を活用したふるさと 農園の事業スタッフなどの体験活動を通して、丹波市市島町 の災害復興と地域の活性化の支援を行う。 ■参加者:経営学科18名、教員3名
2016	2016/8/14	地域連携事業	尼崎市100周年事業 潮江サマーフェスティバル	丹波市よりふるさと農園による丹波の野菜、果物物販、等の 出店と丹波市マスコット「ちーたん」参加
2016	2016/12/2～12/4	インターンシップ	経営学科インターンシップ	丹波市の復興まちづくり協働事業「アジサイ栽培による農 の再エコジコへの本学学生のホー—産埋 丹波市災害復興と地域活性化支援を行いながら、学生の地域ビ ジネス、地域活性化への意識形成と問題意識の形成を狙 う。 ■参加者:経営学科11名、教職員2名
2016	2017/1/7	グローバルスタディ	グローバルスタディ事前学修	2017年2月のグローバルスタディで実施するマレーシア北部 水害被災地域調査に向けた 事前学修として丹波市の復 旧・復興状況の視察と行政対応、ボランティア等について学 んだ。今回の活動と、マレーシアでの活動をあわせて比較研 究を行い、2017年度の復興シンポジウムで発表を行う。 ■参加者:人間心理学科4名、英語教育学科4名、教職員4 名
2017	2017/07/28～ 08/06	インターンシップ	経営学科インターンシップ	丹波市の地域活性化に資する全国高等学校女子硬式野球 選手権大会の運営スタッフと、地域資源を活用したふるさと 農園の事業スタッフなどの体験活動を通して、丹波市市島町 の災害復興と地域の活性化の支援を行う。 ■参加者:経営学科2年 14名、3年 2名 教員3名(交代)
2017	2017/08/26～27	地域連携事業	復興シンポジウム	丹波市復興シンポジウムにて、GS参加学生の発表とパネル ディスカッションの本学学生のホー—産埋 ■参加者:上記+8/27(日)のみ登壇者(グローバルスタディ 参加者)5名、教員2名
2017	2017/10/29	地域連携事業	あじあん祭	あじあん祭での特産物販売とパネル展示による丹波市PR
2017	2017/12/8～10、 12/16～17	インターンシップ	経営学科インターンシップ	丹波市北岡本自治会が行う森林整備事業における復興植 樹の準備・運営・事後作業を通して、丹波市市島町の災害 復興と地域の活性化の支援を行う。
2018	2018/5/12	プロジェクトマネジメント演 習Ⅱ	経営学科 プロジェクトマネジメント演習Ⅱ	7月経営予定の中竹田地区における里山ツリーハウスの設置(イン ターンシップで活動)に向けての現地見学及び水道事業普及開発プロ ジェクト関連施設の見学を行う。 ■日時:2018年5月12日(土) ■参加者:経営学科学生2年53名・教職員5名
2018	2018/7/12	ボランティアニーズ調査・ 被災状況調査	災害ボランティア	平成30年7月豪雨災害における丹波市での災害ボランティア活動実 施についての事前調査を行う。 ■日時:2018年7月12日(木) ■場所:丹波市役所市島支所 ■出席者:丹波市復興支援室 秋山係長 関西国際大学 村田セーフティマネジメント教育センター長、 田中課員
2018	2018/7/15	災害ボランティア	セーフティマネジメント教育センター	丹波市市島町において、平成30年7月豪雨によって宅地内等に流入 した土砂の片づけ及び土壌核みの活動を行う。 ■日時:2018年7月15日(土) ■場所:丹波市島町 ■参加者:学生12名・教職員4名
2018	2018/7/15 2018/8/19	サービスラーニング	人間心理学科 サービスラーニング	丹波市市島町において、音楽療法の視点から現地の人々のニーズを 調査した上でミニコンサートを実施及び復興4年イベントシンポジウム への参加。 ■日時:①ニーズ調査 2018年7月15日 ②ミニコンサート 2018年8月19日 ■参加者:人間心理学科学生9名 教職員4名
2018	2018/7/30 ～8/6	インターンシップ	経営学科インターンシップ	丹波市の地域活性化に資する全国高等学校女子硬式野球選手権大会の 運営補助、市島中学校での少年野球教室がホー—及びひいらぎ山出 ふれあいの森の林間広場内ツリーハウス造りとハイキング遊歩道の 整備と交流を通じ、地域活性化支援を行いながら、学生の地域ビジ ネス、活性化への意識形成と問題意識の形成を狙う。 ■日時:2018年7月30日～8月6日 ■参加者:経営学科学生8名・教職員1名
2018	2018/10/27-28	サービスラーニング	あじあん祭	サービスラーニング活動及び丹波市災害復興のパネル展示 丹波市観光協会及び春日町の自治会法人株式会社ゆめの樹の協力 によりあじあん祭での特産物販売及び丹波市PR
2018	2018/7/31～8/3 2018/8/18～8/23	インターンシップ	経営学科インターンシップ	丹波市水道事業普及開発及び復興イベント・北岡本地区森林整備事 業での活動を行う。 ■日時:2018年7月31日～8月3日(水道部事業) 2018年8月18日～8月23日(復興イベント・北岡本) ■参加者:経営学科学生6名・教職員2名(交代)

あった。

「サービスマーケティングA（音楽の癒しによる災害からの復興）」では、音楽療法の視点から市島町の高齢者施設で現地の人々のニーズ調査を行ったうえで、クラシックのミニコンサートを開催した（図2）。事前学修においては、丹波市復興推進室の担当係長が三木キャンパスへ来学し、災

神戸新聞 2016年12月04日 日曜日 面名 丹波 13 27ページ

手作業で一つずつアジサイの株植えに汗を流す大学生＝丹波市市島町中竹田



市が公募した復興まっとう 農園（同市山南町）が提案  
くり協働事業に、生花に特  
殊加工を施すプリザーブド  
フラワーを製造する大地 所の計  
画1万平方メートルで育

# 被災地アジサイで包もう

2014年8月に起きた丹波豪雨の被災農 大（三木市）の学生が手作業で畑に一つづ  
地で加工用の花を育てるプロジェクトとし つ土をかぶせていった。圃場に行けば、来年  
て、丹波市市島町中竹田5日、アジサイの の初夏には、豪雨で傷ついた山あいの村を青  
植え付け作業があった。地元住民も関西農 いうアジサイが包む。 （中西聖大）

## 市島の農地 大学生ら植え付けに汗

て、金庫を農園が買い取  
る。この日は、市と提携して  
いる同大関科学部の地域  
マネジメントコースなどの  
学生11人が班に分かれて  
参加。植え付けは前日から  
手作業で整えた畝に入コ  
ップで穴を掘って株を掘  
え、手で土をかぶせて保温  
用のもみ殻をかぶせいつ  
た。もう1班は別の地帯で  
畝整備を担当した。  
同大名で硬式野球部員  
の手佐美秀真さん（20）は  
「手作業の植え付けは習  
よりしんどいですが、水害  
の話を知っていたので少し  
でも役立てばうれし」と  
と汗を拭いた。アジサイ農  
園を管理する地元住居ス  
1ブファームの社員一  
務局の青木俊博さん（69）は  
「砂防ダムなどハード面の  
復興は形になってきた。地  
域でまっとうして取り組む企  
画なので成功させたいと  
話していた。」

図1 神戸新聞2016年12月4日掲載記

KUIS PRESENTS

高齢者総合福祉施設 丹寿荘

夏のふれあい  
**ミニコンサート**

2018 **8/19** (日)  
10:30~11:15 開場 10:00

【会場】 特別養護老人ホーム 丹寿荘  
丹波市市島町上竹田2336-1  
TEL:0795-85-3251

参加無料  
当日先着  
50名



【お問い合わせ先】 社会連携課  
関西国際大学 TEL:(079-4)84-3505  
FAX:(079-4)84-3502  
E-mail: exc@kuis.ac.jp  
※会場の詳細は 丹-59-930-17-00

【出演者】

**Saxophone**  
サクソフォーン  
木寺 里穂  
(2016年卒)

**Saxophone**  
サクソフォーン  
細見 元希  
(18年入学)

**Percussion**  
パーカッション  
川向 志保  
(19年入学)

【主催・運営協力】 関西国際大学サービスマーケティングプログラム  
NPO法人関西芸術文化支援の森 ゆずらば



図2 サービスラーニングA（音楽の癒しによる災害からの復興）現地活動の様子

害による被害とそこからの復興についての講義を行った。さらに、ミニコンサート当日には、同日に開催されていた復興4年イベント・シンポジウムへも参加し、災害復興の理解を深めた。いずれも、人間心理学科の強みを生かした特徴的なプログラムであった。

当然ながら、このような現地活動を行うには、キャンパスから現地までの移動が必須である。この期間には、丹波市の復興予算を現地までのバス移動費に充当していた。特に直線距離で50kmの距離を移動する交通費を学生の個人負担とした場合、それが理由で活動に参加しない／できないケースが発生する可能性が高い。受講者数を安定させ、プログラムを継続的に維持するためには、交通費を学生負担としない工夫も必要である。そのためには、様々な補助金等の有効活用が必須である。

## 2.2 三木キャンパス内での展開

インターンシップやサービ斯拉ーニングでの現地活動を主としていた第1ステージは、実際に現地活動に参加している学生にとっての学びは深い。しかし、現地活動に参加していない学生や教職員の認知が難しいという課題があった。持続的な連携を維持するためには、そのような層に対して、丹波市との連携協定が実質化していることを認知してもらう必要がある。

そこで、2017年からは、三木キャンパスのあじあん祭(学園祭)で「丹波ブース」を設置し、特産物販売と災害復興のパネル展示による丹波市のPR活動も行った。筆者は、2016年に人間科学部へ移籍したことをきっかけに、この活動から本格的に丹波市との連携事業にかかわるようになった。これまでの現地活動に加えて、人間科学部のある三木キャンパスの学生や教職員に広く丹波市との協定を認知してもらえるように企画したものである。

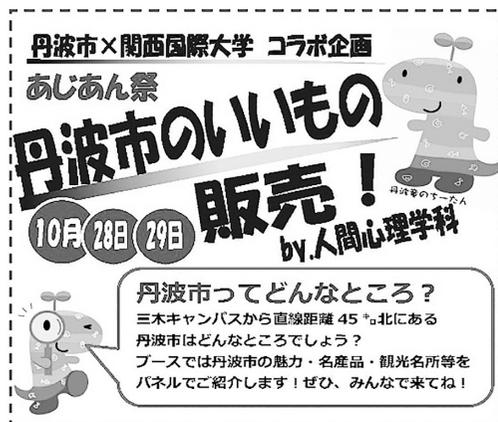


図3 2017年あじあん祭パンフレットより



図4 2018年あじあん祭パンフレットより




2017年は初めての試みでもあったので、復興のパネル展示と丹波市の紹介動画の上映、丹波市観光協会の協力を得たキャラクターグッズの委託販売にとどまった。運営スタッフは人間心理学科1年生から募り、7名が参加した。参加学生たちは、事前に丹波市豪雨災害や恐竜をモチーフにしたキャラクター・ちーたんについての学修を行い、あじあん祭当日には来場者へ展示パネルを説明したり、キャラクターグッズの販売を行ったりした。

続く、2018年の「丹波ブース」は、人間心理学科「サービスラーニングB」の活動の一環として位置付け、受講者によるブース企画と展示販売を行った。展示販売については、前年のキャラクター商品の委託販売に加えて、春日庄米<sup>注5</sup>や黒豆商品も加わり、ブース内容が充実した。



図5 2017年あじあん祭での展示・販売の様子

### 2.3 地域連携へのひろがり

この期間において特筆すべきは、既に地域連携事業が始まっていることである。まず、2015～2016年には、尼崎キャンパスのある潮江地区において尼崎市市制100周年事業の「潮江サマーフェスティバル」に参加している。ここでは、丹波市ふるさと農園による丹波の野菜、果物の物販を行っていた。当日は、丹波市のキャラクター・ちーたんも参加し、広く尼崎市民へのPRを行った。

また、前述のように、2017～2018年の「丹波ブース」は、あじあん祭が一般開放されていたため、地域住民へのPRの機会にもつながっていた。

これらは、連携の初期段階において、既に学部を超えた展開が実現しており、これが2020年の全学的な連携へとつながる礎になったとも言える。

さらに、2018年からはステークホルダーとして、「ゆめの樹」<sup>注6</sup>が加わることになる。「ゆめの樹」とは、地域資源の活用と野上野地区の活性化を目指して、丹波市春日町野上野自治会が設立した自治会法人である。年度当初に市島支所を訪れた際、地域理解を深めることができる場所を探していると相談したところ、ゆめの樹を紹介していただき、訪問したことがきっかけであった。丹波市の春日インターチェンジ近くには、道の駅の成功例として全国的にも有名な「おばあちゃんの家」があるが、現地活動ではそれ以外の場所を開拓したいと考えていた。

協定の準備前から連携事業を継続してサポートしていたのは、丹波市の復興推進室であった。市島支所に復興推進室を設け、丹波市豪雨災害直後には、失われた橋や道路などのハード面の復興が急がれており、学生の参加が地域へ活力を与える結果にも繋がっていた。2018年頃からは、復興の第二段階に入り、ソフト面の復興に変化していく。いわゆる、被災者の心のケアなどである。

しかし、市の関係者は人事異動により担当者が変わるといふ避けられない問題がある。担当者の変更に伴い、関係性の再構築が求められるのである。しかし、地元に着目した団体の場合、担当者が変わるケースは少なく、安定した関係性を維持することができる。結果的には、現在のよ様な丹波市との強く安定した関係性を持つことができるようになったのは、「ゆめの樹」との出会いが大きい。一種のパラダイムシフトであった。

### 3. 第2ステージ（2019～）における連携

#### 3.1 プロジェクトとしての活動へ展開

2019年度の活動内容を時系列にしたがって整理したものが、表3である。

表3 2019年度における活動

月日	項目	内容	実績
2019/5/26	地域連携事業	地域連携事業 田植え体験 「丹波路満喫ツアー」	丹波市春日町、自治会法人「ゆめの樹」の協力のもと、田植え体験を行う。また丹波市の特産品について知り、米収穫後、学内食堂にて「丹波デー」と称し、メニューを考案する。 ■日時：2019年5月26日（日）8:30～16:30 ■参加者：人間心理学科、看護学科、経営学科学生 15名 教職員3名
2019/9/15	地域連携事業	地域連携事業 稲刈り体験 「丹波路満喫ツアー」	丹波市春日町、自治会法人「ゆめの樹」の協力のもと、田植え体験を行う。 本学学園祭の保護者会イベントにて使用するお米を購入予定。学生及び地域住民等へ春日の庄米を紹介する。 ■日時：2019年9月15日（日）8:30～16:30 ■参加者：人間心理学科、看護学科、経営学科学生 15名 教職員3名
2019/10/10	地域連携事業。	丹波デー	学生食堂を運営するコープフーズの協力により、全メニューで丹波特別栽培米「春日の庄米」を使用。学内学生教職員に丹波の味を紹介した。
2019/10/19・20	地域連携事業	あじあん祭	丹波市観光協会及び春日町の自治会法人株式会社ゆめの樹の協力によりあじあん祭りでの特産品販売及び丹波市PR

2019年度は新型コロナウイルス感染症が流行する以前であり、連続した現地活動ができた1年であった。第1ステージのように、インターンシップやサービスマーケティングの現地活動は行わなかったものの、「丹波路満喫ツアー」プロジェクトとして年間を通じて丹波市と関わることができた1年であった。

ステークホルダーからの要請もあり、この年から春日庄米の田植えと稲刈りを行うことになった。この活動を軸に、実施後に三木キャンパスでの活動を拡張させ、学生食堂で提供する米を全て春日庄米にする「丹波デー」や、あじあん祭での「丹波ブース」へと繋げ、現地活動と学内での活動をリンクさせるプログラムを構成した。

ただし、第1ステージのように、授業との紐づけを行っていないため、参加者はその都度に募集することになる。プロジェクトを機能的に継続させるには、これまで以上に工夫が求められるのである。企画側は、いわば個々の点の活動を線の活動へ繋げることを意識しておくことが重要なのである。しかし、実際には、田植えへの参加が動機付けとなり、次の稲刈りに参加したり、「丹波デー」当日には学生食堂を訪れる等の行動に結びついていた。

人間科学部・丹波市連携協力協定事業

# 丹波路満喫ツアー

協力金 (参加費) 300円 (5ヶ月)

【知る】丹波市の豊かな自然と名産品について学びます

【体験】丹波米の田植え体験をします。出来たお米は食べたいお米があります

【米】丹波特産の夏刈り米を使ったランチをいただきます

2019 5/26 (日) (小雨決行)  
三木キャンパス8:20集合 (神鉄緑が丘駅8:30集合)

【申し込みについて】  
要旨の申込書に記入の上、社会連携課(三木キャンパス)まで提出してください。  
申込締切: 5月22日 (水) 17:00

【定員】 先着15名

【協力金 (参加費)】 300円 (5ヶ月) (お米は300円分まで)  
※お米は、お米の産地から直接お米を仕入れさせていただきます。

【持ち物】 飲み物・タオル・帽子・雨具  
お弁当は各自でご用意ください。お弁当は各自でご用意ください。

【お問い合わせ】 関西国際大学 三木キャンパス コミュニティ交流総合センター (社会連携課)  
TEL:0794-84-3505 E-mail:exc@kuins.ac.jp

人間科学部・丹波市連携協力協定事業

# 丹波路 第2弾 満喫ツアー

協力金 (参加費) 300円 (5ヶ月)

【知る】丹波市の豊かな自然と名産品について学びます

【体験】オンラインで稲刈り体験をします。実際に稲刈りに参加して収穫したお米をいただきます

【米】丹波特産の夏刈り米を使ったランチをいただきます

2019 9/15 (日) (小雨決行)  
三木キャンパス8:20集合 (神鉄緑が丘駅8:30集合)

【申し込みについて】  
要旨の申込書に記入の上、社会連携課(三木キャンパス)まで提出してください。  
申込締切: 7月31日 (水) 17:00

【定員】 先着15名

【協力金 (参加費)】 300円 (5ヶ月) (お米は300円分まで)  
※お米は、お米の産地から直接お米を仕入れさせていただきます。

【持ち物】 飲み物・タオル・帽子・雨具  
お弁当は各自でご用意ください。お弁当は各自でご用意ください。

【お問い合わせ】 関西国際大学 三木キャンパス コミュニティ交流総合センター (社会連携課)  
TEL:0794-84-3505 E-mail:exc@kuins.ac.jp

図6 2019年「丹波路満喫ツアー」募集チラシ

人間科学部・丹波市連携協力協定事業

5月の田植え、9月の稲刈りに、本学学生がボランティアで参加しました!

10月19日(土)、20日(日)に開催される「あじふん祭」で販売します!

# KUIS × 新米

本学食堂の全てのメニューで丹波特別栽培米『春日庄米』が使用されます!!  
この機会には是非ご賞味ください!!

## 丹波デー

2019年10月10日(木)



図7 2019年「丹波デー」告知ポスターと当日の様子

### 3.2 「丹波ブース」から「丹波マルシェ」への発展

あじあん祭における「丹波ブース」にも変化があった。2019年は、人間心理学科主催とし、学科の学生を中心としたボランティアサークルによってブース運営を行った。展示販売については、キャラクター商品、春日庄米や黒豆商品などの委託販売に加えて、丹波の農園で収穫された枝付き黒豆の販売も行った。「丹波のいいもの販売」と銘打っていたため、これまでも「黒豆の販売はないんですか？」という問い合わせも多かったが、3年目にしようやく実現したのである。普段、学生たちは軽トラックの荷台一杯に運び込まれてきた枝付き黒豆を見る機会もないため、関わった学生たちにとっては、それだけでも十分に貴重な体験だが、販売までの下準備を経験することもできた。

さらに、2020年には、あじあん祭から独立して単独で「丹波マルシェ」として開催し、活動を継続した。単独で開催した理由は、新型コロナウイルス感染症によってあじあん祭が中止となったからである。「丹波マルシェ」は、あじあん祭で実施する「丹波ブース」と異なり、通常の授業期間中の昼休みを利用した販売となる。そのため、実質の活動時間が短くなる。さらに、枝付き黒豆の収穫時期も考慮すれば、10月と12月の2回に分けての開催が妥当だと判断した。これにより、10月は枝付き黒豆の販売のみ、12月は春日庄米や黒豆商品の販売と、販売作業が複雑にならずに実施できた。ここでの運営スタッフは、筆者が当時担当していた人間心理学科2年生の「専門演習Ⅰ・Ⅱ」の受講者であった。いわゆるゼミ生である。2年生ゼミの内容は、全学的に共通となっているキャリア教育やアンケート調査以外は自由度が高く、授業の中で丹波に対する理解を深める事前学修的な内容を盛り込むことや、活動後にeポートフォリオを使ったふりかえりができた。



運営スタッフを当初のボランティアから、サービラーニング活動やゼミ活動と関連付けた参加を促すことで、より深い関わりへと変化し、連携の継続へと繋がったのである。2020年は、一種の地域連携の完成形とも言える1年であった。

#### IV まとめ

本稿では、丹波市との連携事業について段階別にふりかえり、その成果と課題について考察した。

本事業は、まず人間科学部からスタートし、次に三木キャンパス全体へ、さらに全学での連携へと、時間をかけて徐々に広がっていった。一気に連携の輪を広げれば、無理が生じて、継続しない。また、双方にメリットがなければ継続しない。

今回、活動が継続して行うことができた要因は3つある。

1つ目は関係を深化させる時期においては、サービラーニングやインターシップなどの経験学習と関連付けたことが継続につながったことである。正課授業として、学生と教職員が集中して一時期に活動を行うことで関係性の基礎が出来上がった。

2つ目の理由として、本学では継続的に社会連携課のサポートがあったという点がある。科目担当者のみ、あるいは1教員の研究室で推進するだけでは、充実した事業展開を継続することは困難である。最悪の場合、その教員が転出すれば、関係性が途切れ、事業が継続しない場合もあるからだ。

3つ目のポイントは、各種補助金の活用である。前述のように、移動距離に伴って交通費の負担は大きくなる。この部分を補助金等でカバーすることができれば、継続性を見出すことができる。

さらに、今後も活動を持続していくためには、学内における実施のターゲットを経営学部地域マネジメント専攻の一般学生に絞ることである。2.1でも述べたように、現在、経営学部の新入生の90%近くは強化クラブ学生である。しかし、強化クラブ所属の学生は、学期中はリーグ戦、夏季休暇や冬季休暇には合宿や全体練習などを行っており、継続的に地域と関わる活動を行うことは困難である。地域マネジメント専攻の学びのフィールドは「地域」である。サービラーニングやインターシップ、プロジェクトなどの経験学習を通して学びを深め、地域活性プロデューサーの育成を目指す専攻との親和性は極めて高い。いわば、第3ステージへの発展である。

ただし、本学においては、留学生の在籍は山手キャンパスと尼崎キャンパスに限られており、経営学部地域マネジメント専攻のある三木キャンパスには留学生は在籍していない。地域からは留学生の参加も期待されており、国際大学としてもその期待に答える必要はあるだろう。今後、留学生の参加も課題である。

地方が抱える共通の課題は、一見すると日本だけの課題のように見える。しかし、実は国や地域を超えた世界共通の課題であり、日本の地方に共通する課題であり、SDG'sの視点にもつながるものである。今後も、本学においては地域密着型の大学として、地方の課題を解決する一助となる活動を持続的に行っていく必要がある。

【注】

- 注1 2014年8月16日から17日にかけて丹波市市島地域を中心に、最大時間雨量91mmという集中豪雨が発生し、甚大な被害をもたらした。
- 注2 『広辞苑』(第7版) 新村出編, 岩波書店, 2018
- 注3 本稿で用いる詳細な記録の全ては、本学社会連携課によるものである。
- 注4 経営学科のインターンシップは2年次開講科目であり、一般的な就業体験の意味合いよりも現場での活動を通して、教室での学びを深めるという要素が強い科目である。
- 注5 丹波特別栽培米「春日庄米」とは、カルティック農法という特別な方法で栽培されたもの。
- 注6 <http://yumenoki-nokono.jp/> (2021年9月10日閲覧)

【参考文献】

- ・飯盛義徳編著『場づくりから始める地域づくり 創発を生むプラットフォームの作り方』学芸出版社, 2021
- ・木村俊昭『地域創生 成功の方程式—できる化・見える化・しくみ化—』ぎょうせい, 2016
- ・丹波市まちづくり部復興推進室編『平成26年8月丹波市豪雨災害復興記録誌』, 丹波新聞社, 2020
- ・中根雅夫『地域を活性化するマネジメント』同友館, 2010
- ・藤山浩, 豊田知世, 浦田愛『「小さな拠点」をつくる』農山漁村文化協会, 2019
- ・横山陽二『地域プロデュース入門 元気な地域はこうして創る』中日新聞社, 2015
- ・渡部薫「地域づくり活動の持続可能性についての検討—地域プラットフォームの形成と再構成に焦点を置いて—」『地域デザイン学会誌』No.9 特集地域コミュニティと地域デザイン, 33-53頁, 2017